OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『スッタニパータ』「ヴァンギーサ経」における涅槃について
Author(s)	富田, 真理子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2008, 42, p. 49-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4986
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『スッタニパータ』「ヴァンギーサ経」における涅槃について

富　田　真　理　子

初期仏教経典の古層に位置づけられる『スッタニパータ』（Sn）中の一経、ヴァンギーサ経（Vaṅgīsasutta）[1]には、nibbāna, nibbuta 等[2]の「涅槃」関連語彙が集中的に現れ、初期仏教で涅槃が如何に捉えられていたかを理解するには不可欠の資料である。これまでも、翻訳を含め幾多の先行研究が本経を取り上げてきたが、本経の内容を理解する上で核となる涅槃関連語の解釈は様々である。本稿の目的は、先行研究の問題点を指摘し、本経及び註釈を恣意的な判断を交えず原語に忠実に精読することで、涅槃関連語の語義と各々の関係を考察し、本経は涅槃に関し何を問題にしているのか、また本経から涅槃につき何が明らかになるのかを示すことにある。

まず、涅槃関連語に番号を振りつつ、本経の粗筋を示す。

本経の粗筋（散文）ある時世尊は、アーラヴィーにおけるアッガーラヴァのほこら［cetiya］に滞在していた。それは、ヴァンギーサの師であったニグローダ・カッパ尊者が（1）aciraparinibbuto hoti の時であった。その後、ひとり瞑想中のヴァンギーサに、「わが師は（2）parinibbuto なのか否か」という疑問が生じた。ヴァンギーサは、次の通りその疑問を世尊に尋ねた。（以下韻文）「アッガーラヴァにおいて、よく知られ、名声のある（3）abhinibbutatto であったひとりの比丘が亡くなりました［kālam akāsi］」とまず告げてから、(4)「parinibbutaṃ と知らせてください」と懇願し、「彼は、(5) nibbāyi したのでしょうか。それとも saupādiseso なのでしょうか。どの程度、解脱した［yathā vimutto］のか、それをお聞きします」と問いか

ける。世尊は、Yes/No では答えず、「この世において、名称と形への渇愛を断ち切った。長い間潜んでいた闇の流れを、生と死を、余すところなく渡ったのだ」と語り[3]、ヴァンギーサはその世尊の答えに大いに喜んだ。

Ⅰ．先行研究と問題点

1．涅槃関連語の語義について　上記涅槃関連語につき、解釈の異なる訳例を２つ挙げる。中村［2005 : 72 - 73］は、parinibbuta に「亡くなった」と、〈死んだ〉ととれる言葉をあて、実際に〈死んだ〉と告げる（3）kālam akāsi にも「亡くなりました」とし、別の語彙を同一の事象と捉えて翻訳している。逆に、本庄［1986 : 167 - 168］は、同一語彙を別の事象と捉え、冒頭では parinibbuta を「涅槃に入った」かどうかが疑問としながらも、(4) では「亡くなった」かどうかを問う質問に変え、さらに、自分の師が死んだことを告げる平叙文（3）kālam akāsi を「亡くなったのですか」と、(4) と同じ事象とした上、疑問文として捉えている。上記を含む複数の翻訳を比べてみると、訳者によって解釈が様々であることが分かり、またそれ故に本経における涅槃関連語彙の解釈の困難さを示しているといえよう。

2．接頭辞の有無と語義について　本経の翻訳においては、接頭辞 pari- の有無、つまり「涅槃」と「般涅槃」の間に意味の相違はないとの理解が大半であるが（中村［2005］、本庄［1986］、村上・及川［1986］、Norman［2001］等）、これにも議論の余地がある。同義での使用を認めつつも「般涅槃」が阿羅漢・解脱者の死を表す用例もあると主張する研究者（藤田［1988a : 265 - 266］、宮下［1989 : 24 - 26］、並川［2005 : 96 - 101］等）が多い中、例外を認めつつも同義説を否定する説（片山［2001: 407］）もある。前者の中でも、本来は「涅槃」「般涅槃」とも同義語で、生前で得られるべき境地を表していたが、しだいに「般涅槃」が「解脱者の死」と結び付けられるようになったと考える説（例えば藤田［1988a : 273］）、また、その契機は、

釈尊の死であったとみる解釈（並川［2005 : 100］）など、歴史的な意味展開を想定する研究も存在する。

なお、接頭辞 abhi- を付した abhinibbuta に関しては、parinibbuta とほぼ同義であるとの説が展開されている（藤田［1988b : 3, 5］、並川［2005 : 96 - 97］）。

3．attan について　(3) abhinibbutatto は、接頭語 abhi と atta(n)［Skt. ātman］（自己・自我・霊魂）が nibbuta に付いた複合語で、この語をどう理解するかは未だ確定していない。一例を挙げると、松本［1989 : 200］は、「覆いをとりさられて解き放たれたアートマンを有する」と解釈し、仏教一般の「無我説」とは根本的に対立する概念であるが、ジャイナ教などの「我（霊魂）」を認める説の影響を受け、結果として原始仏典では「アートマン」を認めているとしている。これに反し、村上・及川［1986 : 28, n. 15］は、単に「自分」「自己」を表していると考えている。また、パーリ語 abhinibbutatta にあたるサンスクリットの abhinirvṛtātman について、Schmithausen［1987 : 155］は、atta(n) は単なる接尾辞であり、翻訳の必要がないと解している。

4．ヴァンギーサの最後の質問 (5)　この質問に関しては、2 通りの解釈が見られる。(i) 涅槃したか否か（宇井［1965 : 237］[4]、村上・及川［1986 : 611］、Norman［2001 : 44］、榎本［1993 : 3］、藤田［1988b : 10］、本庄［1986 : 170］、宮下［1989 : 26］）。(ii) 涅槃に 2 種あり、無余涅槃であったか、あるいは有余涅槃であったか（漢訳、中村［2005 : 75］[5]、並川［2005 : 209, n. 58］[6]）である（有余涅槃・無余涅槃については後述）。

以上、本経の涅槃関連語の解釈には多くの問題が未解決である事を若干の先行研究を紹介することで示した。以下では、本経の涅槃関連語を経典レベルと註釈レベルに分離して再検討し、ヴァンギーサの質問の真意を掘り下げることで、上記諸問題について若干の考察を行う。

Ⅱ．経典レベルでの考察

１．経典レベルでの本経の内容（問題点１：涅槃関連語の語義について）
註釈の理解を加味せず経典のみを考察の対象とし、極力解釈を交えず語彙の違いが反映されることを意図した訳語は次の通りである。(1) ニグローダ・カッパは般涅槃した状態になったばかりである。[aciraparinibbuto hoti] (2)「わが師匠は般涅槃したのか、あるいは、般涅槃してないのか」と ['parinibbuto nu kho me upajjhāyo udāhu no parinibbuto' ti.]、ヴァンギーサは疑問を感じ、以下の通り世尊に問いかける。(3) アッガーラヴァにおいて、よく知られ、名声のある、自ら涅槃した（状態にあった）ひとりの比丘が亡くなりました。[Aggāḷave kālam akāsi bhikkhu ／ ñāto yasassī abhinibbutatto.] (4) 般涅槃したと [般涅槃した人のことを] 知らせてください。[parinibbutam vedaya] (5) 彼は、涅槃したのでしょうか。それとも燃料が残っているのでしょうか。どの程度、解脱したのか、それをお聞きします。[nibbāyi so ādu saupādiseso, yathā vimutto ahu taṃ suṇāma.]

２．一般論か特定した質問か　これまで指摘されてこなかった問題に、世尊への最初の問いかけである韻文 parinibbutaṃ には 3 つの解釈が可能だという点がある。(x) 自分の師が「般涅槃した」と言ってくださいと懇願している。(y)「般涅槃した人」とはどんな人かを教えてくださいと、自分の師に特定せず一般論を聞いている。(z)「般涅槃した」自分の師がどんな人だったかを聞いている。韻文の文脈から判断すると 7)、一般論 (y) ではなく、自分の師に特定した質問 (x) か (z) と理解するのがより自然であり、更に散文部分に表された「般涅槃したのか否か」という疑問から、(x) のみが導かれる。

３．涅槃派生語の互いの関係について　冒頭の散文部分では、parinibbutta（般涅槃した）、その後韻文において、生前 abhinibbutatta（自ら涅槃した

状態であった)、parinibbuta（般涅槃した)、さらに nibbāyi［nibbāyati のアオリスト形］（涅槃した）という涅槃関連語が使われているが、問題は、各語の事象に時期的差異が存在するか否かである。差異が存在するなら、語彙の違いが意味や状況の違いを持つと理解されていた可能性は強まる。この問題は、接頭辞の有無による語義の相違とも関連し、涅槃関連語の意味の特定に関しては重要な視点である。ところが、管見の限りでは、この点を考察した研究はないと思われるので、以下に検討する。

可能性としては３つが想定される。(a) 全て生前の同時期に得られた境地である。(b) 生前に abhinibbutatta の境地となり、その後時間的経過を経て parinibbuta ／ nibbāyi の状態となった。(c) abhinibbutatta ／ nibbāyi は生前に得た涅槃を表しており、parinibbuta はそれ以後に得られた境地を示す。

(a) の場合、師が生前に得た涅槃の境地に関する問いを、ヴァンギーサは一貫して発したことになる。このことは、命終[8]とは無関係に、つまり命終を迎えずとも、本経の内容を語り得たことを示している。次に、時間的経過を示す (b) の場合、ヴァンギーサが、般涅槃した状態になったばかりである自分の師に関し疑問が生じていること、そしてさらに、自分の師の命終をまず告げてから、世尊に質問しているという二点を踏まえると、「般涅槃」が命終の時点のことであり、命終を契機として、師の涅槃の状態に疑問が生じたとするのが妥当であろう。最後に (c) の場合、ヴァンギーサは、まず世尊に自分の師が「般涅槃した」ことを確認し、次に「般涅槃」以前、師が至った生前の「自ら涅槃した状態」が、本当に「涅槃した」ことだったか否かを質問したと理解し得る。この場合ヴァンギーサは、生前 abhinibbutatta だった人が命終後に parinibbuta か否かについては把握できていない事になり、更に、生前 abhinibbutatta でも、その状態を保って命終時に必ず parinibbuta になるわけではなかった可能性をも示す事になる。

各語彙間の意味の相違は、先に述べた問題点２（接頭辞の有無と語義）とも関連する。(a) の場合、接頭辞の存在は意味の相違に関与せず、全て生前に得た境地を示す同義語になる。(b) (c) の場合、abhinibbutatta は生前に得た涅槃の境地、parinibbuta はそれ以降の境地を指す。後者は、命終時及び命終後を示すと推測されるが、確定はできない。nibbāyi は、生前とも命終時及び命終後に得た境地とも理解可能である。

問題点３（attan）に関しては、経典レベルのみでは判断できない。原語にそう書かれている以上、単なる接尾辞ではなく意味があると筆者は考え、abhinibbutatta を「自ら涅槃した（状態にあった）」と訳した。なお、abhinibbuta と parinibbuta は同義とする研究結果を先に記したが、過去の翻訳では、筆者が調べた極めて限定した範囲内ではあるが、本経中の abhinibbutatta と parinibbuta とは別の事象と理解し、訳出を変えた意図が窺われる。その中で、abhinibbutatta に「涅槃」という訳語を当てた翻訳は、あまり存在せず、涅槃を生前で得られる境地[9]であると明示するものは、少ないようである[10]。

４．ヴァンギーサの最後の質問 (5)　「我が師は涅槃したのか、燃料の残余があるのか」の意味については、先行研究で指摘されてきた通り、２つの可能性がある。(i)「燃料」を輪廻の要素と看做し、「涅槃した状態なのか、それとも涅槃できず輪廻するのか」を尋ねた可能性、(ii)「どの程度、解脱したのか」とヴァンギーサが尋ねていることから、ニグローダ・カッパ尊者が解脱したことが前提としてあり、二種涅槃のいずれか、有余涅槃か無余涅槃かを問うた可能性である。

これまでの研究によれば、パーリ聖典で二種涅槃を説く経は、It 44（pp. 88 - 89）だけで、初期仏教の後期に確立した説とされる。両者の違いは「身体の有無」に集約され、涅槃を得た阿羅漢の現世での領域と命終後の領域と理解されている[11]。この理解を受け入れる限り、(ii) の場合ヴァンギー

サの質問の「燃料」は「身体」を意味し、質問の意味は「涅槃を得ているわが師は身体がない状態（命終を迎えている）か、身体がある状態（生きている）か」と捉えざるを得ないが、これが文脈にそぐわない事は明白である。従って解釈（ii）は打ち消される[12]。

（i）の場合は涅槃していない可能性を想定している。すると当然、「どの程度、解脱したのか」という問いは困難さを生むが、ヴァンギーサは、師の涅槃を信じ、その確認のため世尊に質問した結果、このような言葉になったと推測することもできるし、涅槃へと至る途中のある程度解脱した状態だったのかを尋ねているとも解釈できる[13]。しかし、この点は経典レベルでは明確にはならない。

以上、本経につき、限定的ではあるが、次のように明らかとなった。ヴァンギーサの師は、生前に涅槃の境地に至っていた。ヴァンギーサの質問の意図は、自分の師が「涅槃したか否か」を問うことにあり、「無余涅槃か有余涅槃か」ではない。質問したのは、師の命終後である。ヴァンギーサの疑問が、生前に得た涅槃に関してか、生前に涅槃を得ていた師の命終時の涅槃の状態についてかは、不明である。接頭辞の有無とそれに伴う語義の相違、また attan の意味は確定できない。

Ⅲ．註釈レベルでの考察

上で考察した箇所につき註釈の理解を確認し、本経の内容をさらに絞り込むことを以下で試みる。

（1）註釈 tasmiṃ cetiye acira**parinibbuto** hoti（p. 346）（その［アッガーラヴァ廟跡の］ほこらで**般涅槃した状態**になったばかりである。）また、ニグローダ・カッパ尊者の名前の由来を（p. 347）Bhagavā pana na nisinattā eva taṃ tathā ālapi api ca kho tattha arahattaṃ pattattā（世尊は［彼がニグローダ樹の下に］座していたことだけから、彼をそのように称したのではなく、さら

にそこで阿羅漢性に達したこと故に（そのように称した））と説明する。

（p. 347）*mutyapekkho* ti nibbānasaṃkhātaṃ muttiṃ apekkhamāno, nibbānaṃ patthento ti vuttaṃ hoti（「解脱を求めて」とは、涅槃と呼ばれる解脱を求めつつ、〈つまり〉涅槃を願いつつ、と言われたことになる）とあり、注釈者は、解脱 = 涅槃と捉えている。一方で、（p. 346）nibbānaṃ arahato gati（涅槃は阿羅漢の行く先）とも説明されている。

（2）註釈は、疑問が生じた理由を次のように説明する。（p. 346）asammukhattā diṭṭhāsevanattā ca, ayaṃ hi tassa parinibbānakāle na sammukho ahosi diṭṭhapubbañ ca ten' assa hatthakukkuccādipubbāsevanaṃ, tādisañ ca akhīṇāsavānam pi hoti khīnāsavānam pi pubbaparicayena.（〔ニグローダ・カッパの〕面前におらず、また〔ニグローダ・カッパの〕習慣を見ていたことから。なぜなら、この者（ヴァンギーサ）は、彼の般涅槃時に、面前におらず、そして、彼の手の悪行などの以前の習慣を前に見たから。またそのようなことは、非漏尽者達にとっても、漏尽者達にとっても、従来からの積み重ねゆえに生じる。）

（3）attan については、（p. 347）*abhinibbutatto* ti guttacitto［ビルマ版註釈：nibbutacitto [14]］apariḍayhamānacitto vā.（abhinibbutatto とは、制御された心［ビルマ版註釈：涅槃に至った心］あるいは、燃やされていることのない心を有する者）。Th-a（p. 199）には、upasantasabhāvo apariḍayhamānacitto（鎮まった自性、燃やされていることのない心を有する者）との説明がある。

（4）（p. 348）*brūhi m'etan* ti brūhi me etaṃ, yaṃ mayā yācito 'si "tam sāvakaṃ Sakka mayam pi sabbe aññātum icchāmā"ti, bruvanto ca taṃ brāhmaṇaṃ *parinibbutaṃ vedaya*（「我にこのことを説いてください」とは、「シャカ族の人よ、我らも皆、かの出家修行者のことを知りたがっています」という私がお願いしたことを私に説いてくださいという〈意味〉。そして説きつつ、その婆羅門が「般涅槃したと知らせてください」〈という意味〉）

352偈d句（p. 61）で、mā mohayi jānam anomapaññā.（完全なる智慧を持つお方よ、知りながら迷わせるな）と、ヴァンギーサは世尊に言う。註釈（p. 350）では、「知りながら」の意味を、jānanto Kappassa gatiṃ（カッパの行き先を知りながら）と理解する。この「行き先を知る」ことについて補足すると、ヴァンギーサは、（p. 345）yassānubhāvena chavasīsaṃ ākoṭetvā sattānaṃ gatiṃ jānāti.（その威力で死体の頭を叩いて、衆生の（死後の）行き先を知る）能力を持っていたが、漏尽者の行き先は判断できなかった。そのため世尊から（p. 345 - 346）“avisayo te ettha Vaṅgīsa, mam’ eva so visayo, khīṇāsavassa sīsan”（「ヴァンギーサよ、これはお前の領域ではない。それは私だけの領域である。漏尽者の頭なのだ」）と告げられたエピソードを踏まえているのだろう。

(5)（p. 350）*yathā vimutto* ti kiṃ anupādisesāya nibbānadhātuyā yathā asekhā, udāhu saupādisesāya yathā sekhā ti pucchati.（「どの程度､解脱したのか」とは、無学のように〈輪廻の〉燃料のない涅槃の領域へ〈解脱した〉か、それとも、有学のように〈輪廻の〉燃料の残余のある領域へ〈行ったのか〉と尋ねている）。註釈家が意図したのは、有学とある以上、「非阿羅漢のように涅槃していないのか」と尋ねたことになる。

(6)（p. 351）［世尊の答えに関する註釈］anupādiseso parinibbāyī ti dasseti（輪廻の燃料の残りなく般涅槃したと示す）。

(7)（p. 351）［世尊の答えを聞き喜ぶヴァンギーサの言葉に関する註釈］*na maṃ vañcesī* ti yasmā parinibbuto, tasmā tassa parinibbutabhāvaṃ icchantaṃ maṃ na vañcesi, na visaṃvādesī ti attho.（「私を欺きませんでした」とは、般涅槃しているが、それ故に、彼が般涅槃したことを望んでいた私を欺かなかった、嘘をつかなかった、という意味である。）

1．註釈レベルから導かれる本経の内容　生前に阿羅漢であったニグローダ・カッパ尊者が命終を迎えた。その場に居合わせなかった弟子のヴァン

ギーサには、自分の師が般涅槃したのか、それとも命終時には阿羅漢を退失していたため〈根拠は以下で論ずる〉輪廻の燃料が残っていて般涅槃していないのか、という疑問が生じた。自分の師は般涅槃したに違いないと思いながら確認すべく世尊に尋ね、世尊の答えから、自分の師が般涅槃した確証を得て、自分の師の修行は無駄ではなかったと、般涅槃したことを喜ぶ。

２．一般論か特定した質問か　ヴァンギーサには漏尽者以外の死人の行く先を知る能力があったという註釈の説明から、師の命終を契機として疑問が生じ、師の命終後の行き先につき確認したと考えるのが妥当であろう。さらに「その婆羅門」という説明は、般涅槃につき一般論ではなく、自分の師に特定して質問している、と註釈が理解していることを如実に示している。

３．涅槃派生語の互いの関係について　注釈に拠る限り、先に示した（b）の可能性、即ち ニグローダ・カッパ尊者は、生前に涅槃を得て阿羅漢となり、その後 parinibbutaṃ ／ nibbāyi ／ anupādisesāya nibbānadhātuyā yathā asekhā ／ anupādiseso parinibbāyi（般涅槃した／涅槃した／無学のように〈輪廻の〉燃料のない涅槃の領域へ／余すところなく般涅槃した）状態は、命終時であると理解されている。従って（a）の「生前の同時期に得た涅槃」を示す可能性は打ち消される。さらに、阿羅漢であったという説明は、生前に涅槃を得ていたことを示し、（c）生前の涅槃が本物であったかどうかを質問した可能性についても打ち消される。

nibbāyi について、註釈では nibbānadhātu（涅槃の領域）／ parinibbāyi（般涅槃した）と説明する。従って註釈レベルでは、pari- の有無は考慮されていないこと、つまり「般涅槃」と「涅槃」は同じ意味で捉えられていることが明白である。しかしながら同時に、注釈では「般涅槃」が命終時及び命終以降の境地を示す際に使われる傾向が見られ、先に問題点２で挙げ

た先学の説が、本経註釈においても裏付けられる。

次に 問題点３で指摘した生前に得られる涅槃 abhinibbutatto の -atta(n) についてであるが、註釈家は、citta（心）と言い換えている。これは、-atta(n) が霊魂を示す意味でのアートマンと理解されるのを避けるためであろう。そしてこの言い換えは、経典の時代と註釈が書かれた時代の間に、-atta(n) に関する思想的展開が存在することを示唆する[15]。

４．ヴァンギーサの最後の質問(5)　ヴァンギーサの質問「我が師は涅槃したのか、燃料の残余があるのか」の意味は、(i)「涅槃しているのか、それとも涅槃できず輪廻するのか」であると註釈家は解釈していたと考えられる。その根拠は、非阿羅漢を示す「有学のように」と説明しているからである。

注釈家は、阿羅漢となったニグローダ・カッパが、nibbāyati とは異なる非阿羅漢を示す saupādisesa の境涯に陥った可能性を示している。この一見矛盾する内容を論理的に理解し得るには、〈いったんは阿羅漢となったが、その後、非阿羅漢へと落ちてしまっていた〉ことが考えられる。現に説一切有部は、阿羅漢が阿羅漢性を喪失し得る可能性を主張する（宮下［1982 : 1030 - 1026］［1983 : 873］参照）。さらに、パーリ聖典にも阿羅漢性の喪失を数度繰り返したゴーディカ（Godhika）[16] の話があり、阿羅漢性の喪失という概念が聖典の段階で既に存在していたことは確かであり、かかる概念を註釈家は念頭に置いていたと推察される。

生前に涅槃の状態に至っていても、生死を超え輪廻を断ち切り（般）涅槃したことが実際に確認できるとすれば、それは命終時あるいは命終時以降であろう[17]。ヴァンギーサや周りにいる弟子達には、命終を迎えたニグローダ・カッパ尊者の（般）涅槃の確証を掴むことができず、世尊に確認したといえる。また、生前に涅槃を得て阿羅漢となっても、命終時まで涅槃を保てる保証はなく、涅槃の境涯から退失していた可能性があること

から、命終まで修行を続けたと推測できる[18)]。

Ⅳ．まとめと今後の課題

これまでの翻訳及び諸研究では、「般涅槃」を「阿羅漢の死」及び「死後」としてのみ注目する傾向にあった。この問題に対し筆者は幾つかの新しい視点からSn「ヴァンギーサ経」を考察した。最後に、これまでの考察に基づいた筆者の一解釈を提示し、批判を仰ぎたい：涅槃はまず「生前に得る」ものであり、命終は「生前の涅槃が保たれているかどうかが明らかになる区切り」と看做され、従って、命終時の「(般) 涅槃」を、「生前得られた涅槃の状態が、命終時にも保たれている状態」と捉える。さらに、このことが修行者の重要な関心事であったと位置づける。これは翻って、生前に涅槃を得ていたとしても、命終後までその状態が継続する保証がなかった可能性を示唆する。

上記の解釈は、極めて限られた範囲から得られたものである。今後、他の経典についても同様の分析を行いたい。保留された幾つかの問題についても、仏教以外の諸文献を視野に入れた包括的な語彙収集とそれに基づく緻密な検証が行われなければならない。

参考文献

赤沼智善［1967］『印度佛教固有名詞辞典』法藏館（初版 1930, 破塵閣書房）.

宇井伯寿［1965］『印度哲學研究』第二 , 岩波書店（初版 1926, 甲子社書房）.

榎本文雄［2005］「nibbuta / nivvuḍa について」『長崎法潤博士古稀記念論集 仏教とジャイナ教』平樂寺書店 , pp. 553 - 560.

榎本文雄［2002］「ヘルンレ写本中の『雑阿含』断片をめぐって ──『雑阿含経』, 世親 ,『倶舎論』真諦訳の位置── 」『櫻部建博士喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』平樂寺書店 , pp. 139 - 153.

榎本文雄［1993］「涅槃についての若干の考察 ──ジャイナ古層経典を中心に── 」 ジャイナ教研究会発表資料 , pp. 1 - 3.

榎本文雄［1982］「初期仏典における三明の展開」『佛教研究』第 12 号 , pp. 63 - 81.
片山一良［2001］「パーリ仏教における涅槃」『駒沢大學佛教學研究紀要』第 59 號 , pp. 478 - 462.
中村元［2005］「ヴァンギーサ」『ブッダのことば　スッタニパータ』岩波書店 , 第 44 刷（初版 1984）, pp. 72 - 75.
中村元［2004］『仏弟子の告白 ── テーラガーター ── 』岩波書店 , 第 15 刷 , (初版 1982), pp. 228 - 231, n. pp. 292 - 293.
中村元［1993］『中村元選集【決定版】原始仏教の思想 I』第 15 巻 , 春秋社 .
長崎法潤・渡辺顕信訳［1985］「イティヴッタカ（法のうた）」『ブッダの詩 II』原始仏典　第八巻 , 講談社 , pp. 195 - 339.
並川孝儀［2005］『ゴータマ・ブッタ考』大蔵出版 .
本庄良文訳［1986］「小さき章」『ブッダの詩 I』原始仏典 第七巻 , 講談社 , pp. 147 - 177.
藤田宏達［1988a］「涅槃」『岩波講座・東洋思想 インド仏教 2』第 9 巻 , 岩波書店 , pp. 264 - 286.
藤田宏達［1988b］「原始仏教における涅槃 ── nibbāna と parinibbāna ── 」『印度學佛教學研究』第三十七巻第一號 , pp. 1 - 12.
松本史朗［1989］『縁起と空 ── 如来蔵思想批判 ── 』大蔵出版 .
宮下晴輝［1989］「涅槃についての一考察」『大谷學報 』第六十九巻第一号 , pp. 17 - 35.
宮下晴輝［1983］「阿羅漢退失論（その二）」『印度學佛教學研究』第三十一巻二號 , pp. 873 - 870.
宮下晴輝［1982］“On the Retrogression of the Arhat in the Abhidharmakośa”『印度學佛教學研究』第三十巻第二號 , pp. 1030 - 1026.
宮元啓一［2005］『仏教かく始まりき ── パーリ仏典『大品』を読む ── 』春秋社 .
宮本正尊［1979］「原始仏教における悟りの問題」『日本佛教學會年報』第四十四號 , pp. 33 - 47.
村上真完・及川真介［1986］『仏のことば註（二） ── パラマッタ・ジョーティカ ── 』春秋社 .
J. W. de Jong［2000］“The Buddha and His Teachings”, Wisdom, *Compassion, and the Search for Understanding; The Buddhist Studies Legacy of Gadjin M. Nagao,* ed. Jonathan A. Silk, Honolulu, pp. 171 - 181.
K. R. Norman［2001］*The Group of Discourses*（*Sutta-nipāta*）, Second edition, Oxford, pp. 42 - 44.

K. R. Norman［1993］“Aspects of early Buddhism” *Collected Papers*, vol. IV, Oxford, pp. 124 - 138.

Sakamoto-Goto, Junko［1993］“Zu mittelindischen Verben aus medialen Kausativa”, *Jain Studies in Honor of Jozef Deleu*, ed. R. Smet and K. Watanabe, Tokyo, pp. 261 - 314.

L. Schmithausen［1987］Review of Sanskrit - Wörterbuch der buddhistischen Texte aufs den Turfan - Funden 2, Lfg., *Zeitshrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 137, pp. 151 - 157.

注

1）パーリ仏典は全て Pali Text Society（PTS）版を使用し、略号は *A Critical Pāli Dictionary* の Epilegomena に従う。底本：Sn II - 12, pp. 59 - 62. 註釈：Pj II, pp. 344 - 351. Pj では本経を「ニグローダ・カッパ経」（Nigrodhakappa-sutta）とする。パラレル文献：『雑阿含経』第 1221 経, 大正蔵 , 2 巻 , p. 333 上中 . 及び Th 1263 – 1278, pp. 113 - 115. 註釈 Th-a III, pp. 198 - 202.

経典の新古層の判定には異論もあるが（宮元［2005 : viii］, de Jong［2000］）、本稿ではこの方面での最新の成果である並川［2005 : 8］にひとまず従う。

2）nibbāna の語源について、従来よく言われる「吹き消す」は誤解であり、Sakamoto-Goto［1993 : 300, n. 15］や榎本［2002 : 149, n. 22］が指摘するように、「消える」が本来の語源である。

過去分詞形 nibbuta については、藤田［1988a : 265］、中村［1993 : 873］、松本［1989 : 198］とも、語源を nir+vṛta (cover) とし、否定の接頭辞 nir がついた形で、「覆いをとりさること」「ときほごされた状態」と捉えている。しかし、並川［2005 : 74］は、nir を「否定」ではなく、全く逆に「確定」ととり、「しっかりと覆う」という意味ではないか、と定説を覆す見解を述べている。これらの意見に対して榎本［2005］は、nibbuta が cover（覆う）の意味の動詞語根 √ vṛ に由来する説に疑問を呈し、ジャイナ文献でパーリ nibbuta のアルダマーガディー語対応形である nivvuḍa の用例を改めて検討し、nivvuḍa 自体にこれらの意味を積極的に認める根拠は見出されず、仏教のパーリ文献においても nibbuta が nibbāyati (nir √2vā) の過去分詞の役割を果たして『火の消えた』意味で用いられることを指摘している。筆者もこの説に準じる。

3）本経において唯一、世尊が語った言葉である。355 偈 “Acchecchi tanhaṃ idha nāmarūpe ti Bhagavā ／ Kaṇhassa sotaṃ dīgharattānusayitaṃ, ／ atāri jātimaraṇaṃ asesaṃ” — icc-abravī Bhagavā pañcaseṭṭho. 主語がないため、はっ

きりとニグローダ・カッパ尊者のことを述べたかどうかはここからだけでは不明であるが、その後のヴァンギーサの喜びの言葉から、それは確認できる。

4）宇井［1965 : 237 - 239］は、ヴァンギーサの問いの意味は、一貫して生前に得た涅槃についてであり、既に完全な涅槃に達していたか否か、であったと解釈する。

5）「かれは、消え滅びたのでしょうか。それとも生存の根元を残して安らぎに帰したのでしょうか」。この和訳の意図は把握しづらいが、パラレルである Th 1274 の注記（中村［2004 : 292］）を見る限り、有余涅槃の概念の萌芽と見做しているようである。また、nibbāyi を Sn では「消え滅びた」と訳し、Th では「安らぎに帰した」と訳す。

6）(i) の解釈をとる村上・及川［1986］を引用し、有余依に「涅槃界」を補い、「あるいは、有学者たちのように、有余依［涅槃界］であるのか、と尋ねることである」と独自の解釈に変更している。

7）ヴァンギーサは自分の師が熱心に修行したことなどを挙げて世尊の答えを引き出そうとしている。344 偈 : Nigrodhakappo iti tassa nāmaṃ ／ tayā kataṃ Bhagavā brāhmaṇassa, ／ so taṃ namassaṃ acari mutyapekho ／ āraddhaviriyo daḷhadhammadassī.（「ニグローダ・カッパ」と、かのバラモンの名前を、世尊よ、あなたはつけました。彼（わが師）はあなたに敬礼しつつ、解脱を求め、勇猛さを得て、行じました。堅固なる法を見る者よ。）354 偈 ab 句 : Yadatthiyaṃ brahmacariyaṃ acāri ／ Kappāyano, kacci 'ssa taṃ amoghaṃ,（ある目的を持ってカッパヤーナは清らかな行いをしましたが、それは彼にとって虚しかったのでしょうか。）さらに 345 偈 ab 句では、Taṃ sāvakaṃ Sakka mayam pi sabbe/ aññātum icchāma samantacakkhu,（シャカ族の人よ！我らも皆かの弟子のことを知りたいと望んでいます。遍く［見る］眼を持つ者よ！）と、はっきりと世尊の弟子であった自分の師のことを知りたいと告げている。また世尊の答え（注 3 参照）も、ニグローダ・カッパ尊者のことを語っている。

8）涅槃とは「生死を超え渡る」ことから、筆者は涅槃を得た者につき「死」を用いず「命終」を使うこととする。

9）パーリ聖典中に abhinibbutatta は、Sn 343, 456, 469, 783; Th 1253, Ja II no. 277; Ja III no. 304 に現れるが、全て生前で得られる境地を示している。このことはまた、abhinibbuta が「現世」という熟語である diṭṭhadhamma と複合語としてパーリ聖典に表れることからも裏付けられる（用例は Sn 1087, Sn 1095, MN III 130）。この問題についての詳細は別稿を期したい。

10）parinibbuta ／ abhinibbutatta の翻訳：本庄［1986 : 167, 168］涅槃に入った・亡くなった／心平静な、中村［2005 : 73］亡くなった／心が安らぎに帰した、

村上・及川［1986 : 611, 602］入滅（般涅槃）した／自らは寂滅した、漢訳：般涅槃／大徳称於世（これらは別事象との解釈）。対照的に、宇井［1965 : 237 - 239］の解釈は、両者とも生前の涅槃（注 4 参照）、Norman［2001: 42］gained quenching ／ with self completely quenched（同義との解釈）。

11）中村［1993 : 924］、藤田［1988a : 275］、宮本［1979 : 34］、宮下［1989 : 28］、片山［2001 : 467］、Norman［1993 : 137］、長崎・渡辺［1985 : 241］、並川［2005 : 103］参照。

12）論理的に該当しない二種涅槃の質問であると考えた先行研究は、It 44 において有余涅槃界のことが saupādisesā nibbānadhātu と表記されていることに囚われた結果か、あるいは、pari- が付された般涅槃を「完全な涅槃」そして pari- のない涅槃を「不完全な涅槃」と捉えるようになったという思想の展開に起因するのではないかと筆者は推測する。この思想の展開に関しては、宇井［1965 : 231 - 258］、藤田［1988a : 272 - 286］、宮下［1989 : 30 - 35］、片山［2001 : 467 - 462］、並川［2005 : 102 – 108］等参照。

13）註釈 It-a（p. 166）には、解脱には心解脱と涅槃と 2 つあると書かれている。*Vimutto* ti dve vimuttiyo: — cittassa ca vimutti, nibbāṇañ ca. Arahā hi sabbakilesehi vimuttattā cittavimuttiyā pi vimutto, nibbāne pi *vimutto.*（解脱している、というところで、2 つの解脱がある。心解脱と涅槃である。阿羅漢はあらゆる煩悩から離れている状態ゆえに、心解脱においても解脱し、涅槃においても解脱しているから。）榎本［1982 : 74 - 81］は、修行道体系としての心解脱・慧解脱の思想の成立をあげている。涅槃と解脱の関係については今後掘り下げていきたい。

14）註釈 Pj Ⅱ, p. 347, n. 2.

15）筆者は、村上・及川同様、初期仏教では例えば Dhp 380 (p. 107) の attā hi attano nātho attā hi attano gati/ tasmā saññāmay' attānaṃ assaṃ bhadraṃ va vāṇijo.//（何故なら、自らが自己の保護者であり、自己のよるべであるからだ。それ故、自己を制御すべきである、商人が優れた馬を制御するように。）によっても確認できるように、単に「自分」「自己」を表していると考えているが、この接尾辞は他にも多くの用例があり、簡単には片付けられない問題である。

16）赤沼［1967 : 212］によると、末羅（Malla）王族の息子。世尊に見え、親しき友人 3 人と共に比丘になった。SN Ⅰ pp. 264 - 269 参照。ゴーディカは、6 度「心解脱」（cetovimuttiṃ）し、退いた後、7 度目に心解脱してから、自殺により般涅槃を得たとある。阿羅漢退失、自殺による般涅槃など、興味深い内容であるが、今後の課題とし、本稿では詳しく取り上げない。

17）351 偈（p. 61）でヴァンギーサは、釈尊のことを pahīnajātimaraṇaṃ asesaṃ

（余すところなく生死を捨てた方）と称えている。生前の涅槃は生死を「捨てる」に対し、命終を迎えた涅槃は、生死を「渡る」（注３参照）と表されている。

18）本経の考察結果から筆者はこのように考えるが、熱心に修行をした（注７参照）のが、生前の涅槃を得るまでのことか、その後命終までのことかは、本経だけでは明確にはできない。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Nibbāna Described in the *Vaṅgīsasutta* of the *Suttanipāta*

Mariko TOMITA

There exist various studies and translations of the *Vaṅgīsasutta* of the *Suttanipāta*, in which mixed understandings about *nibbāna* can be detected.

In this paper, I try to lead to the most probable interpretations by the philological examination of the *nibbāna*-related words in this *sutta* and its commentary, and give some useful suggestions on how *nibbāna* was perceived in early Buddhism.

The texts, differentiated between the *sutta* and its commentary, are thoroughly studied respectively, avoiding arbitrary judgments. As a result, the most probable interpretations are led as follows: *nibbāna* must be attained in one's lifetime, at which he becomes an *arahat*. For him, the end of his life is of great concern, because it becomes clear right then whether he has kept the state of *nibbāna* or not. This suggests the possibility for an *arahat* to lose the state of *nibbāna*. In another words, there is no guarantee for an *arahat* to be able to maintain the state of *nibbāna* until the end of his life. Therefore, he continues his practice earnestly even after gaining *nibbāna* to make sure that he keeps the state after closing his life, too.

キーワード: Vaṅgīsasutta, Suttanipāta, nibbāna, parinibbuta, arahat